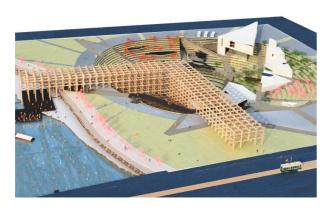
1 環境の部分

自然の対義語は人工である。つまり『人間側』という意味で、人はその言葉をもってして自然をコントロールし、生活している。しかし近代人々は、「環境」の対義語さえ「人工」と置き換え、それらもまた広告化され消費の免罪符へと変換されるだけである。バナナもカップラーメンも本もiPadも自然を人工に加工したものである。しかし環境とは、人工も自然も自分も含めた全体であり、環境問題もまたその流れの部分である。提案は、人が部分であると認識できるように、様々な環境と向き合える空間を作ることである。



2 循環すること=懐かしさ

部分であることを知るためには、**直線的**な時間に対して、人が唯一原点へ還ることのできる「**懐かしさ**」という感情が必要ではないだろうか。環境の中で常に行われている"循環"が日常よりもより感じられ、過去の自分と向き合える場所を作ること。そして自分が環境の部分であることを知ること。例えば、季節の変わり目の匂いや、自分の住む都市の当たり前すぎて気づかない発見、祭りの活気などの、日常の「彩り」である。何気のない身近な循環の方が実感しやすい直接『五感』で人が感じるような、非常に曖昧なものの方が大切である。それは時間を感じ季節を感じ、その中の些細な変化を過去と重ね、未来を再考する。そして新たな循環をうむ。人の「**心の循環**」である。

3 計画地概要

計画地:広島県広島市中区基町5番25号

敷地面積: 32500 m

旧太田川に面したこの敷地は、新球場の建設に伴い移設されることになり、現在は使用されていない旧球場跡地である。南側に原爆ドーム、丹下健三が生んだピースセンター・そして都市軸が敷地上を通る。東側に県立体育館・美術館・図書館・中央公園などの「公共施設地区」南東には、広島市のメインストリートである本通りが通り、その周辺に商業施設が多く集まる「商業地区」がある。また交通としては、南側に広島駅から市内を巡る路面電車が走り、西側には市内の拠点であるバスセンターがある。

ここから、この敷地が広島にとって非常に意味を持った敷地であることがわかる。

またこの場所には、年間 10t(1000 万羽)にも及ぶ 千羽鶴が送られており、現在は、保管室に送られてい るが、年間で教室 3 室分にも及ぶため、これらの廃棄 について問題になっている。

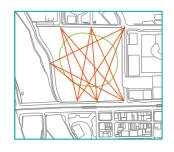


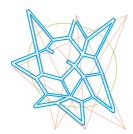
4 プラン

へこみ:まず、日常と人とを「柔らかいへこみ」(断面アーチ)によって切り離す。これは、過去のイサムノグチのアーチ案を反転したものである。そして、底から見た時に、文化(図書館)川(自然)平和(軸線)など何となくそれぞれが感じられるような状態を造る。



視線・導線:まずこの建築を人に認知されることが先決だと考えた。よって視線を敷地周辺の主要ストリートや太田川・平和軸線上から延ばし軸を重ねる。そこから凹みにあわせた高低差の導線を配置する。

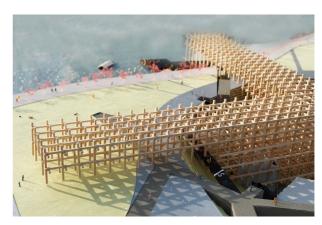




図書館:図書館は、主に使用するのは市民であるため、視線によって削られ、配置している。そして一人による利用頻度(循環頻度)が高いため循環のペースを一日から一週間に設定し、凹みにあたる太陽の角度によって内部の人が移ろいながら本を読めるように設計した。



季節:季節によって匂いや彩りがわかりやすく変化するように、季節の木をそれぞれのエリアに配置。例えば、キンモクセイを年間平均風向きの北北東に配置することにより、匂いを設計する。



平和の軸線:増えていく千羽鶴に合わせ対応できるようなボリュームが必要である。よって 5×5 の大きな木造格子を配置し、鶴をかけられるようにする。そこへ和紙工房を配置し、鶴を和紙へと加工する。それを、8.6 の灯籠流しのイベントに使用する灯籠へ加工し彩りを川へ。平和への想いの循環を生み出す。



都市の時計:この建築は、時間(季節)・賑わい(イベント)・平和などが、彩りの循環によって様相として表れ、この建築を通し人が、様々な環境と向き合える『都市の時計』になっている。

